

***特別寄稿*泥かきボランティア体験談**

石巻ボランティアに参加しました その②



4月22～23日、一泊二日の泥出しボランティアツアーに参加した内田恵美子さんの体験レポートです。

(①より続く)

1階におりると、そこには汚泥が残っており、乾いていたときはわりやくかったのだが、濡れると真っ黒の異様な物体に変身。拭いても拭いても、汚泥が出てくる感じ。床を一生懸命掃除している人がいたけど、壁を触るとさらに汚泥が落ち、もとの木阿弥状態。暗い階段下をよく見ると、汚泥がまだ大量に残っており、スコップで掻きだされた泥を一輪車で運ぶ。汚泥は、表面乾いていても中は真っ黒の粘土のようで、気味が悪い。この狭い空間でこれだけでくるということは、全体に運ばれた汚泥はいったいどのくらいになるのか? そもそもこんなボランティアにたよる原始的方法では、取りきれない。梅雨になるまえにある程度きれいにならないと、伝染病の巣窟になりそう。匂いにも耐えられない。

昼ご飯をさつとり、1階に集中して掃除を進める。窓ガラスは私がデッキでこすってもきれいにならなかったけど、後からきた愛知のボランティアの人がやったら少しはましになっていった。ここでも無力感。あと1時間半ほどになり、仕上げにはいる。まだだれもいなかったの、1階の一番奥の更衣室にとりかかると、泥は掻き出され、かなりきれいになっていったが、よく見ると、180センチほどの棚の上に、汚泥が残っている。。塵取りであらかたとしてしまい、雑巾できれいにしたら、また床が泥だらけ。。上をみると、天井と蛍光灯の間にごみが挟まっている。。きれいにしたら、更に泥が。。拭いてあった棚も、隅にちよつとこのこつていると、棒切れでついで

みると、更に泥が。。もともとこの部屋を担当していた人がもつたので、その人を手伝いながら仕上げていく。やつとそれなりにきれいになったと思つて、床のドアをあけると、そこには水がまだたまっていた。ポンプ等なしには無理だとあきらめ、そのままドアを閉める。最後は2階の拭き上げ掃除を友人とコンビでやり、終了。途中通りかかった、運動部系の数名がきれいになったと言つてくれた時は、ちよつとだけうれしかった。

1000円カッパ、手袋、マスクを脱ぎ捨て(後で処分)、長靴をさつと洗いバスの中へ。途中のサービスイリアで着替える。着替えた後に、だれかのリュックから漂ってくる匂いでまた気分がちよつと悪くなる。かき揚げうどんをサービスイリアで食べたときは、やつと日常に戻つた感じがし、不思議な非日常の一日は終了。

(その他感想)



1.文明国でありながら、6週間たつても(注*4月25日時点)あの状態が続いているのは、被害区域の大きさだけが問題なのか。これだけの破壊があつたから、廃棄物の置き場にも困るかもしれないが、人間が長期間生活する場ではないし、これから暑くなるとさらに衛生面の悪化が懸念される。復興会議で、財源の話をする前にまずは、最低限の生活の場を与えることに

あざとびにがんばりました

交通費を払い、休日を使い、決して簡単ではない重労働をするために被災地へ赴くボランティア。西表という遠隔地にあつて、そのリアルな声を聞く機会は大変貴重なものと思ひ、「号外」を発行する運びとなりました。泥出し作業でお疲れにもかかわらず、素晴らしいレポートを書いて下さつた内田恵美子さん、掲載にあたり仲介の労をとつて下さつた御木茂則さんに、この場をお借りして御礼申し上げます。



現在、黒糖募金の集計と、次期支援活動(ボランティア支援)への移行作業のため、募金を休止しております。募金再開の折には、みなさまからの引き続きのご支援を、ぜひまたよろしく願いいたします。

週刊

東北に黒糖を送ろう! 大作戦

しんぶん

号外 ②

毎週火曜日発行予定